

楷

岡山大学附属図書館報

OKAYAMA UNIVERSITY
LIBRARY BULLETIN

NO. 10

1990
FEBRUARY

特集／選書 収集 コレクション構築

教職員や学生のみなさんの情報要求に、本学の蔵書の実態はよく応え得ているでしょうか。

蔵書量、資料購入費、選書、配置等の実態にかかわる各種のデータはいずれも、

本学の整備の必要性を示していると言わざるをえません。

国立学校の財政をめぐる環境は厳しく、単に予算増の中でのみ問題を吸収しようという

楽天的な考え方は通用しないようです。

ここで本学の蔵書づくりのあり方について再考してみる必要があるのではないのでしょうか。

この号は、選書の理念、選書方針、収集組織、資源共有化等々、本学の課題についての提言を特集しました。

中央図書館のコレクション構築

矢野光雄

1 はじめに

資料は、建物と人とともに図書館を構成する三要素の一つである。いずれをとっても本学図書館の緊急課題であるが、ここでは館報「楷」編集委員会の求めに応じ、資料収集問題について、その問題の所在と解決への糸口を探ってみることにしたい。

2 コレクション構築について

かつて米国で「Book selection (図書選択)」と呼ばれていたことが、60年代に「Collection building (蔵書建築)」と呼ばれ、いま「Collection development (コレクション構築)」、「Collection management (蔵書管理)」などと呼ばれているという。図書の選択あるいは選書の作業が、なぜこのように呼



ばれるようになったのか大変興味深い。

いま、十分な説明は出来ないが、図書館情報学関係の最近の文献などでみる限りでは、選書概念が変わってきたようである。選書作業は、図書館業務全体の流れのなかにおいて、資料を収集、組織、保管蓄積する工程の一環として位置付けられている。

また、コグスウェル (Cogswell, James A) は、大学図書館のコレクション構築の目的を遂行するためには、蔵書の質量両面にわたる調査、蔵書の再編成、共同収集、共同保管など新たな業務の開発が必要であることを示唆している。

このような選書概念の変化は、増大する学術情報、多様化するメディア、それに正比例して増加する情報要求、これらを相手に日常の業務をこなしてゆく図書館にとって、従来の図書選択論や選書論では納得出来なくなったことによるものであろう。

そこで、このコレクション構築の視点から本学図書館の資料収集問題について考えてみたい。

3 図書館の役割

一 研究図書館機能について

平成元年3月現在の本学の蔵書数は、図書142万6千冊余、雑誌2万6千種余で、国立大学の中でも上位にランクされる。これが主な利用対象者である本学の教職員・学生など約1万5千人余に対して、充分であるかどうかの判断はかなり難しい。時々、“資料が少ない”あるいは“新しい資料がない”というのを耳にすることからすれば、本学のいまの蔵書では不十分と言わざるを得ないであろう。しかし、たとえ蔵書がいまの2倍になったとしても、ユーザーは充分とは言わないのではないだろうか。なぜなら、研究者は自らの研究活動の成果として、常に新たな学術情報を生み出すものであり、他の研究者はそれを再び研究の素材として活用し、次の活動を

展開する。従って、そこにはいつも情報に対する強い欲求があり、絶えることはないからである。

そうだとすれば、図書館は、何をどれくらい備えるべきかについての方策を立て、情報要求に対する具体的な対応策を講じなければならないだろう。そのためには、まず図書館の役割をはっきりさせておく必要がある。

大学図書館に学習、研究、総合、保存の4つの図書館機能があるとする考え方は、すでに「楷」No9でご案内のとおりである。このうち取書問題に深く関わりのある機能は、学習図書館機能と研究図書館機能の2つである。前者は、学生の教育と学習活動を支援するためのものであるから、何を備えるべきかははっきりしている。

しかし、後者は少し複雑である。それは大学における研究室の機能と図書館の研究図書館機能とが混同されやすく、明確さを欠くからである。特に、図書資料を研究の素材として研究活動を行う研究室では、書架があり、図書や雑誌が並んでいて、必要な時に必要な資料を取り出してこれを活用している光景は、図書館のそれとほとんど変わらない。一体、どこが違うのであろうか。その相違は、サーバーとしての機能があるかどうかに関わっているといえよう。

図書館の研究機能は、もちろん研究者の研究活動を支援することにあるが、研究室と異なるのは、ユーザーの情報要求に対し、研究上必要な資料や情報提供を業務とする人が配置されているということである。図書館の情報提供活動は、資源共有の考え方に立った共同利用、蔵書構築・管理に支えられているもので、このような考え方や体制が基盤となければ、そこに研究図書館機能があるということではできないのである。本学図書館には少ないけれども人は配置されている。しかし、提供すべき資源が不足している。ここに問題がある。

4 コレクションづくり

本学中央図書館蔵書106万余冊のうち約5割は各学部の研究室や資料室備付けの研究用資料である。中央図書館の研究用資料が弱体であるのはなぜだろうか。

一般に本学では、研究用資料は研究費で購入され、図書館で購入支払の手続きをすますと再び研究室に戻ってしまい、図書館へ配架されることはない。図書館に配架される場合は、研究室で必要なくなったときか、特別な理由で研究室に置けなくなった場合である。これは見方を変えれば、研究者は研究に必要な情報源を自前で収集、蓄積、利用していて、結果として、図書館に対する資料依存度が低く、研究用資料充実のためのシステムづくりや財源づくりの必要性を弱めているのではないだろうか。

さて、ここで考えてみたい。いま、情報化時代である。情報の量の増大と多様化によって、一学部、一研究室単位で収集できる範囲は量的にも予算的にも限度がある。そうであるならば、研究資料充実のために、中央図書館において小規模ながら実施されている特別図書、全学共用図書の収集システムを、更に拡大発展させることが考えられる。

文部省の大型コレクション収書計画にみられるごとく、研究資料の利用環境は、ひと昔前とは異なっている。本学の蔵書構築も、全国的な学術情報システム網の整備状況を勘案しつつ、全学的な視点から行う必要があるのではないだろうか。

5 選書ポリシーと組織について

コレクションづくりには選書ポリシーとそれを構想し立案する組織とが要る。

資料収集は、必要な資料を選ぶこと、つまり選書と、選ばれた資料を入手すること、つまり収書からなる。機能的には一連の働きとして連動しているが、それぞれの特性からこれを分けて考えてみる。

選書実務において、選ぶか選ばぬかの判断は、それがユーザーに求められているか、資料価値が高いかによるが、いずれにしてもそこに選書ポリシーがなければならない。ポリシーは、その図書館の果たす役割によって立てられ、それは図書館のコレクション構築のあり方を左右するものとなる。この際、本学図書館も、資料収集問題を専門に取り扱う委員会を設けてはどうか。現状と将来を見極めつつ、新たな選書ポリシーをつくり、その委員会でポリシーに沿った資料を選ぶ必要があるのではないだろうか。

このごろ私は、中央図書館は次のような資料を収集すべきではないかと感じている。

まず第一に、学習用資料である。第二は高額図書資料で、研究者が共同利用できるものである。前に述べたとおり、本学の研究図書は各学部にあってそれなりに活用されており、図書館に備える研究図書は、それらの資料と相補完されるものでなければならない。そして第三は、参考図書である。各国の百科事典、辞書及び書誌は、資料構築の基本となるもので、学習に、調査研究にまたレファレンス業務に不可欠である。世界各国の言語辞典を揃えて、図書館に行けば言葉についての調査はすべてOKであるとしてみたい。参考図書の整備充実、は、図書館員の責務であろう。

選書における職員の役割は、何があって何が無いのか、ユーザーは何を求めているか、何が利用され利用されていないか、更には出版情報など選書に必要な情報の提供である。魅力ある蔵書は、ユーザーであり研究者でもある教官と職員との協力によって構築されるものである。

最後に、収書の問題にふれたい。そこには選定された資料の確実な入手と必要な財源確保の問題がある。入手に当たっては予算の有効活用とすばやい対応が望まれよう。事務側の組織的努力に関わるところが大きい。

(やの・てるお 附属図書館事務部長)

本学附属図書館の収書をめぐって

神立春樹

1 蔵書・図書館の現状と問題点

私が岡山大学の教員となったのは1970年4月であるが、その年に74万7千冊であった附属図書館の蔵書数は、87年には138万3千冊と、この間におよそ2倍となった。

文部省の『大学図書館実態調査結果報告』（以下、『実態調査』）によると、1988年5月1日調査では、全国大学平均は31万8千冊、うち国立大学は67万9千冊である。岡山大学の蔵書は、『日本の図書館1988』によると、1987年度で全国立大学中の12位である。グラフは図書館概況（87年度）を示す。

このように、蔵書数も多くなり、整備が進んで一応の水準に達しているとはいえ、研究者の研究資料の未整備を嘆く声は大きい。量的な拡大にもかかわらず、なお弱体な蔵書問題の解決の方向を探ることを意図して、収書のあり方について記してみたい。

2 問題の所以

一応の水準に達したとはいえ、なお岡山大学附属図書館の蔵書が弱体で、研究図書館としての機能が十分でないことの所以として、次のことをあげることができよう。

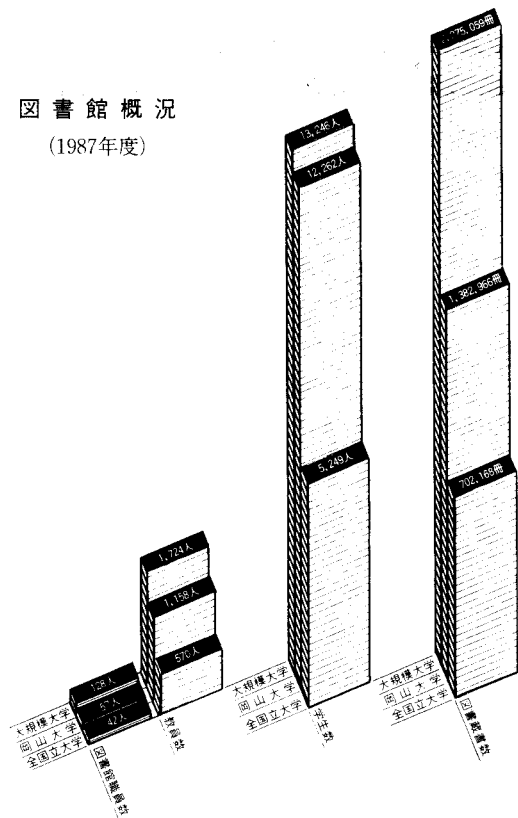
まずは、歴史的な遺産である。1949年に現在の制度による大学が発足したとき、各大学はそれぞれの前身校からの遺産を引き継いだ。蔵書数が岡山大学より上位のところは、前身校を旧制の総合大学とする、北海道・東北・東京・名古屋・京都・大阪・九州、文理科大学とする筑波（東京教育）・広島、商科大学とする一橋・神戸で、これらは前身校から蔵書を引き継いだ。また、古くからの実業専門学校（高商・経専、高農・農専、高工・工専

など）は専門書のそれなりの蔵書があり、それらを前身校としたところは、多くは個性的な蔵書を引き継ぎ、特色ある研究図書館となっている。医科大学のほかは高等学校、師範学校、戦後設立の農専から成った岡山大学は、医学のほかは引き継いだ遺産は大きくない。

歴史的遺産は大きくないとしても、しかし、発足後すでに40年になる。これは決して短い期間ではない。それにもかかわらず蔵書体系が不十分であるのは、この間の図書資料の収書に問題があるからであろう。

以下、この問題を検討しよう。

図書館概況
(1987年度)



3 財源と収書の問題

図書館における収書には、収書組織と図書購入費の二つの問題がある。ここでは、図書購入費について検討する。

国立大学の図書資料費は、『実態調査』によると、平均で、1986年度は、全国立大学2億1千万円、大規模大学6億6千万円、岡山大学3億6千万円、87年度はそれぞれ、2億3千万円、7億8千万円、3億4千万円である。

岡山大学の図書資料費は、全国立大学95校の平均よりかなり大きい。しかし、岡山大学もそれに属する8学部以上の大規模大学15校の平均よりかなり小さい。8学部以上で、学生数にも大差のない大規模大学のなかに、大きな格差がある。

『日本の図書館1988』（87年度）により、この大規模大学15大学を、旧総合7大学、文理科・商科2大学（広島、神戸）、それ以外の岡山など6大学の3グループに分けると図書資料費（平均）はそれぞれ12億1千万円、7億4千万円、3億7千万円となる。87年度は外国学術誌購入予算配分の特別措置があったので、特に大規模大学の資料費の大きさが目立っている。ちなみに、学生数はそれぞれ1万6千人、1万4千人、1万1千人である。

ところでこの図書資料費であるが、『実態調査』によると、①図書館への文部省からの配当のほか、②その他経費からの配当、③寄付金その他からなる。全国立大学では、86年度はそれぞれ11%、88%、1%、87年度は22%、77%、1%、大規模大学では、86年度は9%、90%、1%、87年度は24%、75%、1%で、構成上大差はない。

文部省からの配当は通常年でせいぜい1割程度で、その他経費からの配当が9割に達する。このように図書館本来の経費は少なく、その他の経費、すなわちいわゆる研究費によって行われているのである。

さて、岡山大学であるが、86年度は文部省

からの配当2千万円、その他経費からの配当3億4千万円、寄付金その他0で、構成比は6%、94%、0%である。87年度はそれぞれ、3千万円（特別措置分を除く）、3億1千万円、0で、構成比は、9%、91%、0%であり、教官研究費による購入に大きく依存しているのである。

岡山大学の場合は極めて著しいとはいえ、いずれも文部省からの配当は小さく、その他の経費によっていることに相違はない。

ところで、その他経費からの配当での購入図書であるが、それは図書館備付けと研究室備付けとになる。86年度と87年度とではほとんど違いはないので、後者の数字でみると、全国立大学はそれぞれ40%、60%、大規模大学はそれぞれ44%、56%であるが、岡山大学は、それぞれ16%、84%である。

全国立大学、大規模大学いずれも研究費購入図書資料の4割以上を図書館備付けとして行っているのに対して、岡山大学では圧倒的部分が研究室備付けとなっている。実際には図書館書庫に配架されるこれらの図書資料（文法経3学部のものなど）を研究室備付けというのは、その財源が研究室配当の研究費であり、かつ、その収書が研究室等で行われていることによる。多くの大学では、研究費の図書館への振替えなどによる工夫がなされているが、岡山大学の場合は、研究費での図書資料購入は、学部・研究室単位で行われることが、ことのほか大きいのである。

4 改善の方向

以上のような図書資料費の財源構成は、研究図書館が所蔵すべき大型（高額）の図書資料の収書を困難とする。その解決は、根本的には文部省からの図書館への配当を増額し、図書館の図書購入費を増やすことである。この国の財政、予算にかかわる問題は一大学で成せることではない。しかし、現行の枠のなかでも工夫をしているところもあり、岡山大

学が独自に改善できることも少なくない。

岡山大学の収書における改善は、なによりも、図書資料購入費の有効使用である。その第一は、文部省からの配当経費の計画的・有効的使用である。

1988年度に文部省から配付されたものは、①学生用図書購入費1,973万9千円、②参考図書購入費37万4千円、③特別図書購入費109万4千円、④外国雑誌購入費97万1千円が経常的なものとしてある。

特別図書購入費は大学院人文・社会科学系の4研究科に配分されるもので、外国雑誌購入費は外国雑誌の継続購入に当てられる。

学生用図書購入費は、上記の①・②に学内措置による学生用図書充実費(300万円)を加えて(89年度は2,262万1千円)、参考図書、一般図書、指定図書、全学共用図書の4つの予算項目に区分し、一部図書館職員による資料選択委員会選定分(200万円)を除いて、各学部、研究室に選書を依頼しているが、この大部分は限りなく細分化される。

細分化されずに大型のものが購入できる費目としては、外国図書購入費(いわゆる大型コレクション)があるが、これは毎年ではない。全学共用図書(140万円)は、人文・社会系学部と自然系学部が隔年に購入するものである。

以上、若干の学内措置分をも含めた文部省からの配当額の組み替えであるが、図書資料の購入は限りなく細分化されているといえよう。図書資料の購入は個々の教官の個別的選択に任されることになっているが、この点の検討が第一の課題である。

第二は研究費などでの購入の有効的実施である。

前述のように、岡山大学ではその他経費からの配当のうち図書館備付が極めて小さい。しかし、例えば自然科学系(化学・生化学)、外国雑誌の共同利用のために、89年度は1,360万円が事実上図書館予算として共同購

入に当てられている。このような図書館備付け、すなわち学部の枠をこえた共通部分を設け、大型の基本図書資料の収集を追求すべきであろう。これは研究費の集中に関わる大きな問題であるが、検討課題である。

そして、少なくとも学部など部局では共通費を設けることは可能であろう。経済学部では図書充実費を設け、個人配分研究費では購入できない大型の基本図書資料の購入に当てている。法学部でも基本図書費が設けられている。

このような財源・予算上の考慮や措置と平行して、選書、収書組織が整備され、相応の選書委員会での適切な選書が行われなければならない。集中に伴う弊害の防除が重要であることはいうまでもない。

この収書には、図書館職員の果たすべき役割は大きい。図書館員の本領の一つは蔵書評価と収書であろう。

グラフに示されているように、岡山大学は図書館職員が少なく、かつ専任の割合は約50%と著しく小さいなど定員配置が不適切である。そして、一人あたり受入れ図書数の大きさに示されるように業務過多の状況である。

教官の選択権の大きい下でのこのような状況では、図書館員の収書参加は小さくかつ困難である。蔵書評価、収書のあり方を考えることも疎遠になりがちであろう。しかし、このような状況であればこそ、ライブラリアンとしての本領が発揮できる状況が追求されなければならない。

そして、なによりも、教職員の現状の認識が大切であり、情報共有のツールとしての「図書館報」の役割は大きい。収書の問題に限っても、年間の収書計画及びその内容、あるいは他大学での改善事例など、企画編集の上で一層の工夫を望みたい。

(かんだつ・はるき 経済学部教授)

自然科学系学術雑誌の共同利用

大 森 晋 爾

はじめに

冒頭から私事で恐縮だが、最近私がある研究テーマのために必要とした文献の岡山大学図書館での満足度（見ることの出来た図書と雑誌）は38%だった（総数198論文）。津島キャンパスでの満足度はそのうち8%で残りは医学部だった。また同様に他のテーマについて調べてみると、満足度は必要総数155論文の内50%（津島キャンパス30、医学部20%）だった。つまり、読みたい一次文献は私の専

門分野に限れば、半分以上が岡山大学に無いことになる。このささやかな経験からしても、本学図書館の自然科学系の図書・学術雑誌は、いまだ質的にも量的にも充分であるとはいいがたい。

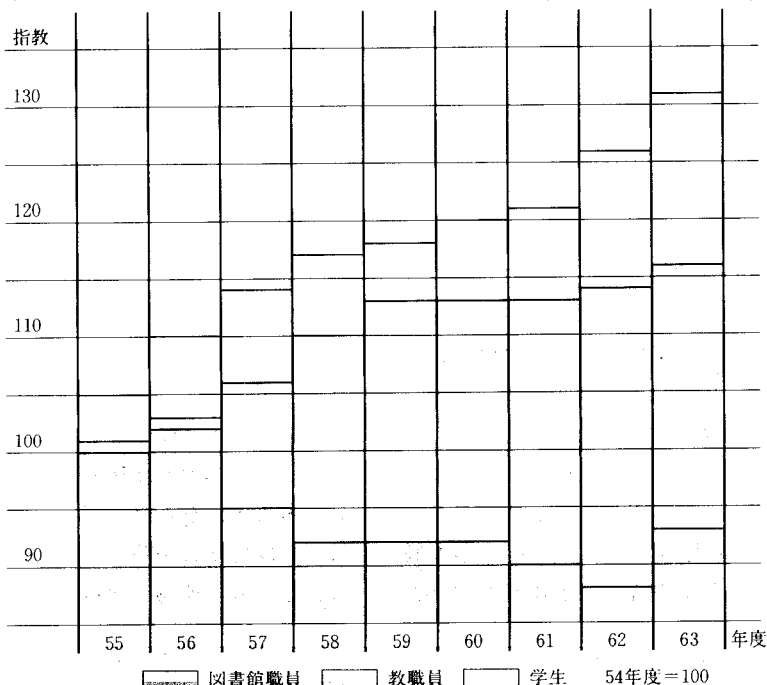
現 状

そこで、岡山大学全体から見た本学図書館の最近10年間（昭和54～63年度）の経過と現状を簡単にながめておこう。

岡山資料費・購入受入数の推移

年 度	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	単 位
国立学校経費	1.0	1.1	1.2	1.2	1.3	1.4	1.4	1.5	1.6	1.7	百億円
図書館資料費	2.5	3.0	3.6	3.6	3.8	3.6	3.6	3.6	3.4	3.7	億 円
図書購入受入数	3.0	3.0	3.8	4.7	3.5	3.1	2.8	2.8	3.0	3.2	万 冊
雑誌購入受入数	3.4	3.6	4.1	4.6	3.8	3.9	4.4	4.4	4.7	4.8	百 種

岡大定員数の推移



(注)『岡山大学史』及び『大学図書館実態調査報告書』による

表を見ていただきたい。岡山大学歳出予算の内約半分を占める国立学校経費（この内過半数は人件費）は年々上昇している。ちなみに、岡山大学の文部省科学研究費予算総額は昭和55年度を100とすると平成元年度は160となり、岡大国立学校経費の上昇率とほぼ同率である。一方、本学図書館の資料購入費（研究室備付けを含む）は、表のごとく56年度以降は増えていない。

同じく、各年度に購入した本学図書館の図書受入数（冊数）と雑誌受入数（種類数）を見ていただきたい。残念なことに、本学の年間購入資料数は57年度以降、図書は大幅に減少し、雑誌は実質的にほとんど増えていないといえる。

次にグラフを見ていただきたい。岡山大学の学部学生と大学院生の定員は年々増え続けている。39年度に理学部に修士課程が設置されたのに始まり、次々と各学部にも修士課程が設置され、更に60年度には自然科学研究学科にドクターコースが設置された。従って、それらの学生の欲求する図書・学術雑誌の質の向上も考えなければならなくなっている。更にこの図によれば、岡大の教官職員定員も年々増加している。しかし図書館職員数（非常勤、パート職員を含む）は、学術情報量の増大に伴い図書館業務は増えているにもかかわらず、横ばい状態である。

共同利用の経緯

以上のような状況の中で、本学においても学術情報資源の確保のために、自然科学分野、特に化学・生化学系学術雑誌の共同購入、共同利用を実現していった。当事者の一人として、その経緯を紹介することとしたい。

Chemical Abstracts（以下 C.A.）は昭和44年当時、医学部生化学教室、工、理、農各学部がそれぞれ購入していた。C.A. の年間購読費は15.7万円（1959年）、24.8万円（1960）、32万円（1966）、47.7万円（1968）、132万円（1970）に上昇し、1986年には192万円と最高価格になった。44年度に医学部薬学科が設

置され、その翌年に将来の薬学部にも C.A. を購読すべきかどうかで薬学科教官が会議をもった。その結果将来的展望を踏まえて、C.A. は最早各学部で購入すべきではないとの結論に達し、45年11月4日に薬学科教官一同名で、図書館長宛に C.A. 共同購入と化学情報センター設置要望書を提出した。この中で薬学部の所有する C.A. のバックナンバーと Decennial Index を供出する意思表示をし、津島キャンパスで将来は全ての化学系学術雑誌の重複購入を中止し、それらの共同購入による共同利用体制の確立を提案した。当時の大倉図書館長もこの理念を高く評価され、中央図書館増築部分に「化学文献コーナー」を設置してよいことになった。

一方では年一回集会することになっていた理・工・農等からなる化学系教官会の場合を借りて、共同利用の趣旨説明と協力を呼びかけた。そして各関連化学系教授に直接お会いして協力をお願いした。幸いにも理学部化学科教官の熱烈な支持を受け、続いて農学部農芸化学科の賛同を得た。残念ながらこの時点での工学部からの賛同は得られなかったので、理・農・薬学部による化学系外国学術雑誌の共同購入、共同利用が49年度より実施された。当時は C.A. を含め各国化学会誌を中心とした13誌から始まった。51年度からは化学系に加えて生化学系の分野が追加された。

おりから翌52年度に文部省が外国雑誌購入費を予算化し、国立大学図書館に配付してくれることになった。この外国雑誌購入費配付を契機として、物理・生物系の研究者間でも共同購入、共同利用の気運が高まり、協議の結果、集中化のために物理・化学・生物系及び中央館に予算配分することにした。53年度から、この外国雑誌購入費を鹿田地区へも配分することになった。55年度工学部工業化学科、合成化学科が共同方式に参加した。いずれにしても当初13誌から始まった共同方式は120誌にまで拡大した。一方文部省からの外国雑誌購入費の配当額は225万円（52年度）、290万円（53年度）、400万円（54年度）、462

万円（55年度）、400万円（56年度）であったが、57年度は財政緊縮の影響から半額に、更に58年度は120万円、63年度97万円と減少してしまった。このような予算削減に伴い継続購入が困難となる雑誌も生じたが、それでも現在約100誌が、この方式で運営されている。そして現在、中央図書館1階の「共同利用自然科学雑誌室」（もと「化学文献コーナー」）に配架、利用に供されている。

医学部では、化学・生化学系の多数の文献を生化学教室で戦前から最近まで継続して購入していた。C.A., Chemisches Zentralblatt, Beilsteins Handbuch という二次文献から Hoppe Seyler, A.B.B., Annalen, B.Z., B.B.A., J.B.C., B.J., J.A.C.S. 等の一次文献に至る多数のものであった。一教室のこれだけの購入努力には頭が下がる。薬剤部には Beilstein や J.C.S. があった。

医学部の図書館分館（58年、鹿田分館に改称）は42年に新館が出来た。この頃医学部教授会で、各教室での重複購入を出来るだけ避け、なるべく分館に集中化しようということになった。生化学教室のように心血を注入し購入し続けた文献を、そんなに簡単に集中化することには、相当の無理があったと思われる。しかし、同教室の化学・生化学系文献の大部分は43年、教室が旧館から新館に移転する機会に分館の方に移管された。その後他教室の文献も、次第に分館の方に集中化されていった。最近では歯学部、医療短期大学部の図書・学術雑誌の集中化がなされた。

私の提言

以上、主として自分の体験を書いたが、本学図書館の図書・学術雑誌の質と量の改善をいかにすべきかについて、私案を提起しておきたい。

その1は、今後ますます共同購入、共同利用を推進することである。例えば、薬学部13講座の1年間の図書・雑誌費用は約540万円であり、医学部のそれは1教室当たり約100万円とのことで、その他にも各教室は独自に

図書費を支出している。これらの金額は既に限界に近いと思われる。しかし図書館関係者の言によれば、現在でも重複図書購入費は非常に高額に上るとのことである。各教官の意識次第で、まだまだ集中化の余地はあるように思われる。この重複を避け生じる差額で、多少利用頻度の少ない文献であっても大所高所の立場から、主要なものは購入、集中化し、多少不便であっても調査のため、図書館に足を運ぶことにしようではないか。

その2は文献寄贈の促進についてである。私事で恐縮であるが、世界で最古の生化学誌 Hoppe Seyler が津島キャンパスに無いようではと思い、私はこれを寄贈している。その他、3種類の雑誌を薬学部図書室と医学部分館に寄贈している。同様に薬学部6教室より18種類の定期刊行雑誌が薬学部図書室に寄贈されている。このように、もし本当に図書館を充実させ教育と研究を発展させようとするならば、校費に期待することにも限界があるので、個人で購入した文献さえも集中化することをお願いし、運動しなければなるまい。

その3は学外からの寄贈制度である。例えば昭和61年12月から岡山大学国際交流事業のための募金が始まった。平成元年12月で締め切られて2億5千万円の募金が出来たとのことである。9年後の岡山大学創立50周年記念事業として岡山大学図書館充実基金募集を考えてはいかがなものだろうか。その基金から生ずる果実を効果的に図書・学術雑誌購入費の一部に当てることも考えられる。あるいは文献寄付コーナーを図書館内に作るなど、図書館資料の充実を促すさまざまな工夫が必要であろう。

なお、外国雑誌センター館について、あるいは資料購入方法の改善や、私が経験した外国の大学図書館との比較について、更に図書館職員定員削減に対応して利用者の協力のしかたについて等々書きたいことは多いが、与えられた紙面がつきたのでまたの機会に譲りたい。

（おおもり・しんじ 薬学部教授）

図書館とオンライン検索に思う

武村昌介

1 はじめに

参考調査係のスタッフの方から、本誌に原稿を書いてほしいと言われたとき、正直いって驚いた。館報である“楷”をあまり読んでいなかったし、なによりも図書館ではまだ端末をさわっていないので、はたして書くことがあるかなと思ったのである。考えてみると、私は、確かに図書館の出入りをよくする。その時スタッフの人に常連として顔が知れたのであろう。そうだったのである。後で聞いた話であるが、私がパソコン通信をやっているとの情報も流れていた模様である。実をいって、やっているといえるほどの大げさなものではない。Nifty-Serveの会員ではあるが、熱中したのは、ほぼ一カ月ぐらいで、今はどういふ訳かほとぼりがさめている。自宅で富士通の旧式のパソコン機種を買い込んで、説明書と首っぴきで、ディップスイッチをセットし、モデムと電話機との配線を苦勞して仕上げたのを覚えている。一年も前のことである。その割にはコンピュータに疎いのは、はたしてどういうわけであろうか。

世はまさに高度情報化の時代である。情報が住みついて離さないのだという。こういう世になると、相手を避けて通るより、とかく親しく付きあった方が住みやすい。情報と友達になるのである。しかし、相手は姿・形を本来もっていないし、かつ分散して存在しているので、一筋縄ではつかまらない。だから秩序化のために、システムというものが、またネットワークというものが必要なであろう。情報をシステムする、つまりは情報システムが思考され、ネットワークが組まれる所があると思う。

また現代は、量の多寡でモノの価値を測る時代ではない。図書館も同様で、たとえば蔵

書数の多寡は重要なことではなくなるであろう。高度情報のネットワーク構築が、これまでの規模の大小の有利・不利の通念を払拭してしまう魔力をもっているからである。いわば、ネットワークの経済性が規模の経済性を陵駕する時代になっている。こうした時代要請の中にあって、身近なところで私たち利用者は何ができるかである。

2 “とく” —オンライン検索—

前置きが長くなってしまった。というのも、もともと、研究者の立場からオンライン目録について書いてほしいという依頼であったからである。そこで遅蒔きながら本題にはいることにしよう。

オンライン検索は、私もごく最近まで体験したことがなかった。カード目録による検索に慣れっこになっていたからである。しかし、平成以降に受け入れられた単行本には、目新しい貸出カードと新形式の請求番号のレッテルがついているのに気は付いていた。なにかな新しいことが始まるなという予感である。まったく新しい図書館の検索システムが胎動しはじめていたのである。

OPECならぬOPAC。オーバックと読むそうである。オンライン閲覧目録のことだが、岡大でもいずれ、この呼称が日常語になるだろう。手元の端末で検索できる目録情報データベースの検索システムである。

OPAC そのものではないが、学術情報センターとつないで、NACSIS-IRという情報検索サービスが昭和62年度から開始している。われわれ大学の研究者や大学院生の学術研究にとって、画期的なもののように思える。たとえば、社会科学でいえば、Social Science Citation Index 誌に対応する索引情報や、引

用情報の二次情報データベースの検索ができることが一つ。もう一つは、実際、私も図書館の端末でやってみたのであるが、目録所在情報データベースの検索である。わが国の大学図書館等に所蔵されている和洋図書・雑誌の総合目録情報から、即時に探したい文献を検索できるという便利なものである。お目当ての文献が、どこの大学図書館にあるかがわかるし、借り出し手続きをしてから手に入れるまでに、今までより、うんと日数が短縮できている。

私は、必要から、1939年版の M. KALECKI の“ESSAYS IN THE THEORY OF ECONOMIC FLUCTUATIONS”なる洋書を検索することになったが、KALECKI と ESSAY の AND 検索により、画面から、章内容とともに、富山大学図書館にリプリント版のあることが判明して一週間内に入手することができたという次第である。感激にも似たものを味わった。研究者は、欲しい文献があれば、どうしても手に入れたい気持ちに駆られることがよくある。一種の宿命みたいなものであろうか。

スタッフの人の話によると、NACSIS-IR のサービスメニューは分野別に23種で、データ量は1,300万件にもものぼるとのことである。岡大では、今のところ、これらのサービスは、図書館の専用端末で利用できる段階でしかないが、研究室からできれば言うことない。正式には、パソコン通信のときのように、個人や講座などが ID 番号を持って利用しなければならぬ。接続料、ヒット料は当然のことかかる。所在目録データの場合だと、各データベースを呼び出す都度一回30円であるが、こと研究者の研究上のメリットから見れば、安いものと思う。二次情報データベースの当該検索サービスは、まだ体験していないので何ともいえないが、利用料金は研究費から落せるはずだし、二次情報データのネットワークシステムといった学術研究上の実用性と効率性が大幅にアップすることを考えれば、少々の料金は問題でなくなる。今日びの高度

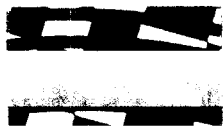
情報化の進展はこの種の料金を引き下げてくれるだろう。

岡大 OPAC の一番星、LICSU-4 による、わが図書館の所蔵検索は、同館のご自慢のものである。リックスユー・フォーと呼ばれている。このシステムで所蔵検索できるのは、岡大図書館蔵書のうち、単行本を主として、約2万件と聞いている。しかし、この検索システムもまだ中間生産物で、近い将来に、内容・機能ともに充実した決定版が用意されるだろう。図書館のスタッフの人達も鋭意、完成に向けて努力されている。二階のカード目録コーナーに足を運び、時には不正確な人名や書名のスペルしかメモして来なかったために、わざわざ研究室へ調べに往復したこともある。カード目録においてそうした手間が起るのも、検索のためのアクセスポイントがそれだけ少ないからであろう。それに、時には立ち、時にはしゃがんでの、あのカードめくりは重労働である。その点、オンライン目録にすると、ポイント不足の手間が省けるのはメリットだし、画面から文献所在の場所も知れる。

オンライン目録がカード目録にとって代わる以上は、アクセスポイントが豊富でかつ使い易いことが第一要件である。たとえば、AND 検索や前方一致という便利なものがある。人名・書名の頭、数文字の入力をする形で、条件を複数追加していき、集合を狭めていってつき止めるというあのやり方である。さらに、総合情報処理センターの DATA-710 による OPAC では、より使い易いようにと、コマンド入力方式も検討されている。外国雑誌の PEACH や古文書の諸職交替などは同センターの力を借りて既になじみのものとなっているが、そうした中、岡大図書館も、OPAC をはじめとするオンラインの新鋭が全力疾走で RUN RUN ならぬ LAN LAN していくのは、何とも頼もしいことである。

どんどん使って、どんどん注文を出して、スタッフの人達をあわてさせよう。それでちようどいいぐらいである。

(たけむら・しょうすけ 経済学部教授)



紙面のデザイン

清水 國夫

印刷紙面の上と下

印刷物のデザインには、それなりの秩序感を保つ法則性のようなものがあるが、いずれにしても、まず私達を取り巻く環境から感じとられた造形感覚をそのまま持ち込んでいるというよい傾向がある。

例えば、見上げる角度から得られた写真や空中に漂う何らかの図版は、紙面の上方へ配置した方が自然な感じに受け取られ、俯瞰図は紙面の下部に配置した方が概して好ましく見える。

晴れた青空は明るい。地面は空よりも暗いことが多い。地上に居る限り空はいつでも私達の頭の上にある。このことから明るい図版は紙面の上部に、その反対は下に配置した方が良いとするのは素朴な表現方法であろう。

ビル等の洋式建築の室内の天井は明るく、床はそれよりも暗いことが多い。建築物の中に入る時、外の空間感覚との違和感があまり感じられない。しかし、和風建築では必ずしも天井の方が明るくなっていないことがよく知られている。家の内部と外を断絶し、内側の別世界を演出するのによく用いられる方法の一つである。印刷物でも同様であって、自然と別の世界を強調するとき用いられている配置であるけれども、標準的な配置の表現とは言えない。

学校教育の美術の時間に色彩についての簡単な知識を教えているが、その内容は、色彩を分類、整理した色体系によっている。この色体系の明度は、無彩色の白と灰と黒を縦に並べ、上に白を置き、次第に明度を低くして一番下に黒を置く図版で示されている。JISで決められている修正マンセルシステム以外の色体系でも明度表示は皆同様である。やは

り、色体系を思い浮かべる時には、同じような空間指向性が何の不思議もなく自然にあるのではなかろうか。この度、図書館概要の表紙を依頼されてデザインしたのだが、イエローを上突き出し、マゼンタとシアンを左右に配置したのは、このスタンダードによっている。黄色は、シアンやマゼンタよりいくらか明度が高い。

もう一つの上下空間

先日、デザインを勉強して、いまマンガ家になったF君に意地悪な質問をしてみた。

上から下へ落下する場面のマンガのコマ割り、どうしても地上に落ちた瞬間が次のページのあたまにきてしまったらどうするか、という問である。解決法はいくちもあるが、彼の言うには、例えば、落下の前段を地上に立って見る通常の視覚で表現し、次のページのあたまのコマでは、一転して上方からの視覚によって落下の瞬間をとらえる。いわば、俯瞰図の一種であるが、これで解決すると言う。確かにそれでもよいのかもしれない。新鮮な表現である。しかし、「次のページ」全体の紙面から言えば、もっと解決法があるのではないかと思うのだが、F君の言うには、そうでもないらしい。

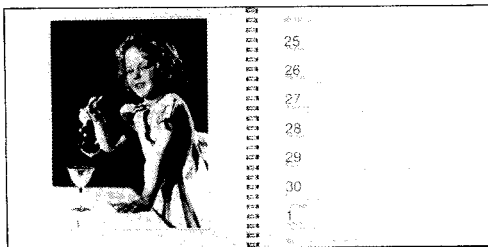
高層マンションに慣れてしまった現今の子供達にとっては、地面が横に広がっている二次元平面図ではなく、三次元空間に点的にあちらこちらと友達が居り、いわば、立体的な空間がイメージとして頭の中に入ってしまったっており、俯瞰図が紙面の上部にあっても少しも違和感がないはずだというのである。

顔を上に向ければ空があるというような昔

風の感じ方がなくなってしまったのかもしれない。宇宙感覚とでもいうのであろうか、上にも下にも空がある。もう浮遊感覚で紙面を配置しなければならなくなったのかもしれない。

印刷紙面の右左

日本の文字は、縦書きでも横書きでもよいし、左から右への横書きでも、その反対でも許される。自動車の車体側面に企業などの名を入れる場合、漢字だけの企業名であれば車の進行方向に対して、左側面は左横書きで右側面は右横書きにすることがよくある。しかし、最近のようにアルファベットや片仮名の企業名であると、このようにはゆかない。もちろん、車だけでなく動く人工物にネームや数字を書き入ると当然同じことがおきる。進行方向と逆向きの文字の横書きには多少の違和感をともなう。このことは、印刷物でもおきる。この館報も左横組で編集しているから、左から右へ文字や図を眼で追うことになる。つまり横組の印刷物は進行方向が右向きの車と同じである。もし車などの図版を入れようとするすると右向きがよいか左向きがよいか迷うことになる。車に記されている文字や数字を無視すれば右向きの方が違和感が少ない。左向きにすると眼の動きと逆になり、その図版が眼に突きささる。これはポートレートの図版でも同じことがいえる。顔が右向きか、見開きの内向きか、正面向きがよいことになる。



ポートレート入り日記帳
ニューヨーク近代美術館編集・発行
シャーリーテンブル

ポートレート図版は左ページに54枚あり、そのうち6枚は上掲のように人物が左向きである。他の左向き図版も人物が画面の右よりに位置しており違和感をおさえている。

ニューヨーク近代美術館が編集・発行したポートレート入り日記帳がある。1週間1ページで見開き左ページにポートレート、右ページが日記になっている。54枚の図版があるが、そのうち6枚が左向きポートレートで、残りは、正面向きと右向きの図版である。このような編集で左向きポートレートのレイアウトがいかに難しいかが分かる。このことは文字面についても言える。日本文字は縦組、横組が自由であるから、一冊の書物の中にも縦横が同居することが多い。図書館概要でも、組織機構図が縦書きになっている。

縦書きでも、2行以上の文章になると右から左へ読むことになり、横組の紙面から浮きあがってしまう。しかし、政府発行の白書には、横組の中に左縦組の文字の入ったグラフなどを見かけることがあるが、いかなのものであろうか。

話は変わるが、最近、電信柱を地下に埋め電線を街中から追放するところが増えてきたので、すっきりするかと思えばそうでもない。今まで電信柱の陰になっていた縦書き、横書きの看板がいりみだれているのが露出してきた。下手なイラストマップを立体にしたような感じである。私達はもうそのような無秩序感に慣れてしまったのかもしれない。

下手なイラストマップは街を眺めた実感がそのように表現させたのであり、街がまず存在して、印刷物があとの情報であるには違いないが、イラストマップを見ると原の街の無秩序感が改めて実感される。

新聞をはじめ多くの印刷物は縦組、横組が混在している。そして、その中で統一感を見出す苦心が払われている。私達の環境としての街を一冊の書物に見立てれば、もっとすっきりした環境になる等と簡単には言えないが、少なくとも造形秩序感を書物の中に求めるように環境に求めたらどうだろう。やがて、環境から受ける秩序感が、書物の造形性に反映することになるのではなかろうか。

(しみず・くにお 教育学部教授)

マスカット

「ライブラリー・リフレッシュ」の刊行 — 新電算化システム・ニュースレター —

新電算化システムの運用開始とともに、その概要を全学の教職員や学生のみなさんにお知らせするための広報紙として、昨年の8月から「ライブラリー・リフレッシュ」をお届けしています。

新電算化システムを契機として、新しい「情報システム」としてリフレッシュしてゆこうという附属図書館の意欲を、この紙名に読み取っていただければ幸いです。

これまで、創刊準備号(1988.8)のほか、以下のようなテーマでお送りしています。

- 新しい目録作成システム No 1 (1989. 9)
- これからの検索方法 No 2 (1989. 9)
- 新しい貸出・返却システム
No 3 (1989.10)
- オンライン検索端末の公開
No 4 (1989.12)

オンライン検索システムの公開

昨年の12月以来、新電算化システムのオンライン検索システムを公開しています。

中央図書館2階の参考調査係横にオンライン検索コーナーを設け、2台の端末を設置してありますので、どんどん利用してみてください。操作手順は極めて簡明にできていますので、容易かつ手軽に利用できるはずです。

現在、本学で所蔵している約2万タイトルの雑誌と1万冊を超える図書(平成元年以降受入分)が皆さんからの呼び出しを待っています。

なお、この検索システムは図書館専用電算機に接続している端末でのみ利用できます。

研究室等のパソコンや端末からアクセスできるシステム(OPAC)は、現在総合情報処理センターのご協力のもとに開発しているところです。

蔵書収容スペース対策なる — 書架増設・集密書架設置 —

中央館ではすでに増加図書が収容能力をはるかに超えてしまい、書庫のなかは収容しきれない図書を床に横積みしたり、箱詰めのままにしておかざるを得ない状況であることはご存知のとおりです。

このためにも新中央図書館構想の具体化が急がれているわけですが、それまでのつなぎとして、現在の施設の中でこれ以上の書架増設の可能性を探るため、昨夏来、情報サービス課職員全員で調査を行いました。

この結果、書庫を中心として書架棚板の数にして705段分の増設が可能であることがわかりました。現在、この結果にもとづいて逐次増設の具体化を検討しているところです。

なお、これに関連して、1階東側の自然科学雑誌コーナーに、新たに集密書架を設置し、これまで配架できなかった学部返却図書等約2万冊を収容する予定です。

目録システム講習会の実施

このたび、学術情報センターとの共催により、本学附属図書館職員を対象とした目録システム講習会を実施しました。

新しい目録作成作業は学術情報センターとのオンラインによるデータのやりとりによって遂行されますので、担当者はそのしくみや端末操作に習熟する必要があります。

附属図書館では、直接の担当者だけでなく、全員が参加して理解を深めることができるようにとの考えのもと、学術情報センターにお願いし、昨年度に引き続いて本学で実施していただいた次第です。

この結果、昨年度受講者と合わせ、ほぼ全員が修了証明書の交付を受けたこととなります。

1. 期日 平成元年11月13日～11月17日
2. 会場 岡山大学附属図書館
3. 講師
(学情セ) 影浦助手 渡辺事務官
(岡 大) 守屋勇夫 古中秀子
川上研三 谷岡修司

岡山大学附属図書館史の編纂

本学では平成元年10月に開学40周年を迎え、記念事業として「岡山大学40年史」を編纂しています。これは「30年史」の後を受け、昭和55年以降平成元年に至る10年間を記述するものです。

附属図書館でも、ワーキング・グループを組織し、附属図書館に関わる部分の原稿作成に取り組んでいましたが、昨年12月脱稿することができました。

原稿の構成は以下のとおりですが、記述の主要な点は、昭和58年の分室統合にはじまる

機構の改組および事務組織の改善、電算化推進等による学術情報サービスの改善、中央図書館の新営等の将来計画です。

第1節 そのあゆみと現在の状況

1. 機構の改組
2. 図書資料の充実
3. 特殊文庫
4. 図書館業務の電算化と学術情報サービス
5. 利用者サービスの拡充
6. 分館のあゆみと現状

第2節 将来の構想

1. 事務組織の再編成と施設・設備の拡充
2. ニューメディアへの対応と学術情報サービスの拡充
3. 図書館機能の充実

鹿田分館で閲覧管理サブシステム稼働

鹿田分館では、かねてより新電算化システムによる貸出・返却業務電算処理の実施に向けて準備を進めていましたが、このたび ID ラベルを図書（製本雑誌を除いて）に貼付する等の作業を終え、4月以降新年度から実施するはこびとなりました。

これにともない分館の利用者のみなさんには、新しい貸出カードを配布いたします。詳細は分館閲覧係までご照会ください。

なお、製本雑誌についても近い将来実施できるよう、引き続き準備作業を継続する予定です。

会議

国内
10.4～10.6 第30回中国四国地区大学図書館研究集会
(当番館 島根大学)

第1分科会 テーマ：電算化と学情システム
・学情システムへの取り組み

・健康管理の問題、その他

第2分科会 テーマ：資料の収集と利用

- ・AV 資料の収集と利用 (CD-ROM、コンパクト・ディスク、ビデオ・ディスク等)
- ・その他 (自由討議)

- 10.19 国立大学図書館協議会理事会
- 10.26~10.27 国立大学図書館協議会中国四国地区協議会係長会 (当番館 岡山大学)
- 協議事項
- ・外国出版物の購入について、その他
- 11.9~11.10 国立大学附属図書館事務部長会議 (当番館 東京学芸大学)
- 協議事項
- ・図書館職員採用の諸問題について
 - ・文献複写に係る著作権の諸問題について
 - ・外国雑誌購入契約に係る競争原理の導入について、その他
- 11.16 学術雑誌総合目録と文編のデータ調査及びデータ記入説明会
- 11.16~11.17 第3回国立大学図書館協議会シンポジウム (当番館 神戸大学)
- 協議事項
- 外国出版物購入に関する諸問題の改善に向けて
- ・競争原理の導入と価格問題

・予定価格の算出、その他

学内

- 10.12 平成元年度全学共用図書選定小委員会、特別図書選定小委員会
- 10.13 第3回図書館データベースに関する総合情報処理センター・附属図書館実務打合せ会
- 10.31 第3回岡山大学附属図書館報編集委員会
- 11.10 第3回附属図書館資料選択委員会
- 12.15 第8回岡山大学新中央図書館建設企画委員会専門委員会
- 12.15 第4回附属図書館資料選択委員会
- 12.22 第2回総合情報処理センター長・附属図書館長協議
- ・OPAC (オンライン閲覧目録) の開発状況について
- 12.22 第4回附属図書館運営委員会
- ・平成2年度学生用図書整備計画について
 - ・新中央図書館建設について、その他
- 12.27 第2回池田家文庫等特殊文庫委員会
- ・池田家文庫のマイクロ化について

研修

平成元年度目録システム講習会 (地域講習会)
(11.13~11.17) 参加者 藤井健司、田邊晴美、丸尾進洋、志水宏子、井ノ上俊哉、難波 望、中野美智子、水田 熙、国重美谷子、瀬尾和子、三浦葉子、
清長 修

平成元年度大学図書館職員講習会 (11.27~11.30)
参加者 谷岡修司

編集委から

塩ぶり、まる餅入り味噌仕立てのお雑煮はつい先日のこと。すでに吉備路にはひばりの声が聞こえます。備中国分寺五重の塔に春の霞がかかるのも遠いことではありません。

さあ、そろそろ穴蔵から出てみよう。狭いところでも角つきあわせるのもいいが、外界も見てみよう、

というのが岡山大学附属図書館1年の感想です。

特集はいかがでしたか。館報は外界に送るメッセージであると同時に、外界の光を呼び込む窓でもあります。また、特集とはメッセージと光を増幅するための仕掛けです。(田村)

岡山大学附属図書館報「楳」 No.10 平成2年2月20日

発行人 矢野光雄 編集委員会 委員長 田村 委員 三棹、水田熙、中野、水田真、大元、清長、田中
岡山大学附属図書館発行 〒700 岡山市津島中3丁目1-1 電話0862-52-1111